

may と can—二つの「可能性」

井筒（成田）美津子

1. はじめに

法助動詞の意味は、認識的意味 (epistemic meaning) と根源的意味 (root meaning) に大別される (Hofmann 1966, Jenkins 1972, Sweetser 1990 等)。英語の may と can は、認識的意味において、共に「可能性 (possibility)」の意味を表わすという点で類似しているが、2つの助動詞は(1)に見られるような意味的な違いがある。

- (1) a. A friend may betray you. (a warning about one person, uttered, for example, by a fortune teller)
b. A friend can betray you. (an observation about friends in general)
(Leech 1987 [1971]: 82)

(1a) は「ある友人はあなたを裏切るかもしれない」という意味で、占い師などが警告として発する発話のように理解されるが、(1b) は「友人だって裏切ることもある」という意味の一般論を表わす。

このような違いがあるにも関わらず、従来の研究には認識的意味の may と can の具体的な違いについての統一的な説明がない。また、これら2つの認識的意味の違いがどのような認識的判断の違いに基づいているかについても十分明らかにされていない。

本稿では、認識的意味の may と can の違いは、thetic judgment (単純判断) と categorical judgment (二重判断) という認識的判断の違いに対応すること

を示し、それぞれの具体的な特徴付けを提案する。そして、この特徴付けを基に2つの助動詞の統語的振舞いの違いについて説明する。

2. may と can の統語的振舞いの違い

まず、認識的意味の may と can の統語的違いについて考察する。

- (2) a. *May it be true?
b. Can it be true?
- (3) a. They may not come if it's wet. (main verb negation)
(=It is possible [that they won't come if it's wet].)
b. You can't be serious. (auxiliary negation)
(=It is not possible [that you are serious].)
- (4) a. "Will you answer the phone?" "It may/??can be your mother."
b. "Who's that at the door?" "It can only be the post man."
c. "There's the door bell. Who can it be?"
"Well, it can't be your mother. She's in Edinburgh.

(Swan 1980: 130; 1995: 123)

まず、認識的意味の may は疑問文に出来ないが、can は疑問文に出来る。また、may は本動詞が否定されるのに対し、can は助動詞そのものが否定される。さらに、(4)のような文脈（電話の相手や訪問者の正体について述べる文）では、may は制限無く現れることが出来るが、can は only や否定要素と共にしか現れることが出来ない。

3. 先行研究

次に、認識的意味の may と can を扱った代表的な研究を概観する。

(5) Leech (1987 [1971])

FACTUAL POSSIBILITY: 'the actual likelihood of an event's taking place'

e.g., The road may be blocked.

(=It is possible that the road is blocked.)

THEORETICAL POSSIBILITY: 'a theoretically conceivable happening'

e.g., The road can be blocked.

(=It is possible for the road to be blocked.)

Coates (1980, 1983, 1995); Quirk et al. (1985)

EPISTEMIC POSSIBILITY: 'to express the speaker's lack of confidence in the truth of the proposition'

e.g., A: Have you got a pen?

B: I may have one. (=It is possible that I have one)

ROOT POSSIBILITY: 'nihil obstat (nothing prevents)'

e.g., Well, I think there is a place where I can get a cheap kettle.

(=where it is possible for me to get a cheap kettle)

Palmer (1990 [1979])

EPISTEMIC POSSIBILITY: 'modality concerned with propositions rather than events'

e.g., You may not like the idea of it, but let me explain.

(=It is possible that you don't like the idea of it.)

NEUTRAL DYNAMIC POSSIBILITY: 'the possibility of an event...

No permission or ability is involved, but the possibility is "neutral."

e.g., I know the place. You can get all sorts of things here.

(=It is possible for you to get all sorts of things here.)

Leech (1987 [1971]) は、may と can の認識的意味をそれぞれ事実的可能性 (factual possibility) と理論的可能性 (theoretical possibility) と呼ぶ。事実的可能性を表わす The road may be blocked. という文は、道路が封鎖される可能性を現在の状況から判断した結果を表わすのに対し、理論的可能性を表わす The road can be blocked. は現実に封鎖されるかどうかは別として、理論上その道路が封鎖可能であるという意味を表わす。

また、Coates (1980, 1983, 1995) や Quirk et al. (1985) は may と can の意味の違いを認識的可能性 (epistemic possibility) と根源的可能性 (root possibility) と呼び、認識的可能性は命題の事実に対する話者の確信度の低さを表わし、根源的可能性は動詞が表わす行為の妨げになるものが何も存在していないことを表わす。

Palmer (1990 [1979]) は、may と can の認識的意味をそれぞれ認識的可能性 (epistemic possibility) と中立的動的的可能性 (neutral dynamic possibility) と呼び、前者は命題に関する法性を、後者は出来事に関する法性を表わす¹。

これらの研究から明らかかなように、may と can の認識的意味には様々な用語や定義が用いられており、2つの意味の違いについて統一的な説明は提案されていない。また、先行研究の分類は意味の上での違いに基づいており、これらの分類が先程挙げた統語的振舞いの違いとどのように関係するのかについてもほとんど何も説明されていない。

そこで、以下では may と can の認識的意味の違いは、それぞれの認識的判断の仕方に違いがあるということを明らかにし、それを基に2つの助動詞の統語的違いについて具体的に説明する。

4. may と can の認識的意味の違い

3節で見た先行研究の分類は名称・定義などに一貫性が見られないが、1つだけ共通点がある。それは、全ての研究が may と can の認識的意味をそれぞれ(6)のような形でパラフレーズしているということである。

- (6) a. epistemic MAY: It is possible that 「出来事が起こる可能性」
b. epistemic CAN: It is possible for NP to do
「主語 NP が持つ性質としての可能性」

このパラフレーズの違いから、may は「出来事が起こる可能性」、can は「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わすと言える。この違いは、次の(7)と(8)を見るとさらに明らかになる。

- (7) a. The road may be blocked by policemen. It depends on where the criminals are going.
b. The road can be blocked by policemen. ??It depends on where the criminals are going.
c. The road can be blocked by policemen. It sometimes has some checkpoints to inspect car drivers.
- (8) a. This illness may be fatal. The possibility may decrease if you receive constant medical treatment.
b. This illness can be fatal. ??The possibility may decrease if you receive constant medical treatment.
c. This illness can be fatal. One of the possible outcomes is respiratory failure.

(7a) の *it* は前の文の出来事が起こる可能性を指す。これに対して、(7b) の *The road can be blocked by policemen.* という文には、出来事の可能性を表わす *it* を続けることが出来ない。むしろ、(7c) のように、*it* が前文の主語 NP (*the road*) を指し、道路そのものの性質を述べるような文になると許容される。同様に、(8a) の *the possibility* は前の文の出来事が起こる可能性を指すのに対し、(8b) の *This illness can be fatal.* は *the possibility* で始まる文を続けることが出来ない。むしろ、(8c) のように、主語 NP の性質を話題にする文を続ける方が自然である。これらのことから、認識的意味の *may* は「出来事が起こる可能性」を表わし、*can* は「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わす。

このように *may* と *can* の認識的意味が、それぞれ「出来事が起こる可能性」と「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わすとすると、この2つの可能性はどのような認識的判断の違いに基づいているのだろうか？

Brentano & Marty は、人間が文を発する際には2種類の判断が関わると述べている。1つが *thetic judgment*、もう1つが *categorical judgment* である (Kuroda 1972, 1992; Lambrecht 1994; Sasse 1987)。

(9) THETIC ('simple'): 'the simple recognition of an event'

e.g., [It is raining].

[There's a dog coming].

CATEGORICAL ('double'): 'setting up an entity and making a statement about one of the properties of the entity'

e.g., [John] [is intelligent].
predication base predicate

thetic judgment は単純判断と呼ばれ、出来事全体の単純認識を表わす。It's raining. などの天候を表わす文や *there* 構文などがその代表例である。一方、*categorical judgment* は二重判断とも呼ばれ、ある実体を取り上げて、その実体についての性質や特性を表わす。Sasse (1987: 555) は、実体を表わす部分を *predication base*、実体に与えられる特性を表わす部分を *predicate* と呼ぶ。例

例えば、John is intelligent. という文は、まず「ジョン」という実体を取り上げ、次に「知的である」というこの実体の特性を述べており、「ジョン」が predication base、「知的である」が predicate となる。

以上をまとめると、thetic judgment は「出来事全体についての判断」、categorical judgment は「ある実体を取り上げ、その実体の特性についての判断」ということになる。以下では、これら2つの判断(thetic judgment と categorical judgment)が、それぞれ may と can の認識的意味の違いに対応することを示す。

まず、(10)~(14)から明らかなように、may は there 構文や状況を表わす it を用いた文に現れることが出来るが、can は普通そのような文に現れることが出来ない。

- (10) a. There may be a film I want to see.
b. ??There can be a film I want to see.
- (11) a. There may be a little rain in summer.
b. ?There can be a little rain in summer.
- (12) a. There may be a strike next week. (Swan 1995: 123)
b. ??There can be a strike next week.
- (13) a. According to the radio, it may rain this evening. (Swan 1980: 130)
b. ??According to the radio, it can rain this evening.
- (14) a. It may be dark.
b. ??It can be dark.

このことは、may は thetic judgment を表わす環境に現れるが、can はそのような環境に現れることが出来ないということを意味する。

但し、具体的な状況や場所が明示されている場合には、there 構文や状況を表わす it を用いた文でも can を用いることが出来る。

- (15) a. At Odeon Cinema, there can be a film I want to see.
 b. In the Sahara Desert, there can be a little rain in summer.
 c. In the southern part of Thailand, it can rain continuously for a month.
 d. Within the ruined castle, it can be eerily dark late at night.

これらの文では、始めに前置詞句を用いて特定の場所を取り上げ、次に there 構文や状況を表わす it を用いた文でその場所についての特性を表わす。つまり、前置詞句内の NP が predication base、それ以下の部分が predicate となり、categorical judgment が関わっていると言える。

認識的意味の can が categorical judgment に対応することは、can が持つ総称的性質からも説明される。(16)と(17)から明らかなように、総称文の可能性を表わすには may よりも can の方が自然である。

- (16) a. Lightning is dangerous.
 b. Lightning can be dangerous.
 c. ??Lightning may be dangerous.
 (17) a. Intelligence is evil.
 b. Intelligence can be evil.
 c. ??Intelligence may be evil.

また、can が持つ総称的性質は、この助動詞が stage-level predicate (進行形や具体的な場所・時間を表わす表現) と共起出来ないということからも明らかである (cf. Kratzer 1995)²。

- (18) a. ??He can be there now. (Coates 1983: 107)
 b. He may be there now.
 (19) He --- be hiding. (MAY 59.4%, MIGHT 18.8%, COULD 18.8%, CAN 0%)

may と can—二つの「可能性」(井筒 (成田) 美津子)

(Brown and Miller 1975, cited in Coates 1980: 215)

(19)は Brown and Miller (1975) の実験結果であるが、進行形が現れる環境では、can が使われると答えたインフォーマントが一人もいなかったことを示している。

Kuroda (1994) は、総称文というのは categorical judgment の形式をとると述べている³。

(20) “As far as generic propositions are concerned, the categorical form of a judgment, i.e. the judgment of the Subject-Predicate structure, is the only form of making a statement.” (Kuroda 1994: 44)

従って、今見たように can が総称的意味を表わすということは、この助動詞が categorical judgment を表わすということの意味する。

以上のことから、(6)で述べた may と can の認識的意味の違いは、それぞれthetic と categorical という認識的判断の違いに対応すると言える。この認識的判断の違いを考慮に入れると、(6)は(21)のように修正される。

- (21) a. epistemic MAY: the simple judgment of the POSSIBILITY of an event
b. epistemic CAN: setting up an entity and making a statement about one of the POSSIBLE properties of the entity

すなわち、認識的意味の may は出来事が起こる可能性を単純に判断するものなのに対し、can はある実体を取り上げて、その実体が持ち得る(持つ可能性のある)特性の1つについて述べるものである。(21)が(6)と異なる点は、(6)では can は「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わすとしたが、(21)では主語 NP に限らず「ある実体を持つ性質としての可能性」を表わすとした点である。このよ

うに修正した理由は、認識的意味の can が主語 NP 以外の実体を持つ性質の可能性を表わす場合があるからである。例えば、既に(15)で見たように、認識的意味の can は there 構文や状況を表わす it を用いた文に現れることが出来る。この場合、can は文法的主語ではなく、前置詞句内の NP についての特性を表わす。さらに、(22)のような不定代名詞の one を用いた文においても、can は文法的主語 (one) ではなく、前置詞句内の NP が持つ性質についての可能性を表わす⁴。

- (22) a. In the Court of Justice, one can be prohibited from speaking for some reasons.
 b. In the countryside, one can be relaxed and get away from the stress of city life.

5. 統語的振舞いの違い：再検討

では、(21)の特徴付けに基づくと、2節で見た2つの助動詞の統語的振舞いの違いはどのように説明されるのだろうか。

まず、(2)と(3)では、認識的意味の may は疑問や否定の対象にはならない(否定の場合は、否定要素は助動詞ではなく、本動詞を否定する)のに対し、can は疑問や否定の対象になるということを示した。(21)で述べたように、認識的意味の may は出来事が起こる可能性についての話者の判断を表わすものであるが、このような話者の主観的判断は自分自身で否定したり、その判断の賛否について聞き手に問うたりすることが出来ない⁵。つまり、ちょうど日本語の「かもしれない」の否定や疑問が存在しないのと同じように、認識的意味の may もそれ自身否定や疑問の対象になることが出来ない。

- (23) a. ??彼は来るかもしれなくない。

b. ?? 彼は来るかもしれないか?

これに対して、認識的意味の can はある実体を取り上げ、その実体が持ち得る性質の1つについて述べるものである。このような場合、ある実体が特定の性質を持ち得るかどうかを問うたり、その可能性を否定したりすることは出来るので、認識的意味の can は疑問や否定の対象になり得る。

次に、(4)のような文脈における容認度の違いについてである。(4)の文は全て、電話の相手や訪問者の正体について述べる文である。認識的意味の can は普通、実体が持ち得る特性のうちの一つしか表わさない。(4a)のように、can が肯定文で用いられると、it が指す指示対象の可能性のうちの一つが「あなたのお母さん」であるということになる。これは、暗に他の人物の可能性があることも示唆してしまうので、電話をかけてきた人の正体について述べる文としては不適當である。一方、(4b)のように only を用いてそれが唯一の可能性であることを示したり、(4c)のように否定要素によってある可能性を否定したりする場合、「戸口に誰がいるのか?」という問いに対する適切な答えとなる⁶。

6. まとめ

以上、本稿では認識的意味の may と can の違いが、thetic judgment と categorical judgment という認識的判断の違いに基づいているということを示し、それぞれの統語的振舞いについて説明した。最後に、現代英語における may と can が表わす意味を(24)にまとめた。

(24) can : 「主語 NP が持つ能力」 e.g., I can lift this stone.

「(主語 NP が持つ) 性質としての可能性」

e.g., The road can be blocked.

「(実体が持つ) 性質としての可能性」

e.g., At Odeon Cinema, there can be a film I want to see.

「許可」 e.g., You can smoke here.

may: 「出来事が起こる可能性」 e.g., The road may be blocked.

「許可」 e.g., You may smoke here.

MORE PROGRESS IN SUBJECTIFICATION

この論文で述べたように、can がある実体 (特に主語 NP) についての可能性を表わすということは、この助動詞がまだ主語 NP の能力を表わす用法を持っていることと密接に関係している。つまり、can はある実体 (特に主語 NP) が持つ能力やそれが持ち得る特性を表わす助動詞である。これに対して、may はもはや主語 NP の能力を表わす用法をもっていない (この用法は 17 世紀終わり頃に衰退した Visser 1969: § 1653)。むしろ、現代英語において may は話者の許可や認識的判断を表わす用法を発達させており、can よりも主体化 ('subjectification' Langacker 1985, 1990) が進んでいると言える。従って、今回取り上げた may と can の違いは、通時的に見るとそれぞれの助動詞の主体化の程度を反映したものであると言える。

註

* 本稿は日本英文学会北海道支部第 46 回大会 (2001 年 10 月 6 日、北海学園大学) での口頭発表に加筆、修正したものである。発表の際に、参加者から有益な助言を頂き、ここに謝意を表したい。また、本文の草稿段階で、貴重な意見を下さった高橋英光、野村益寛両先生、並びに井筒勝信氏にもお礼を申し上げたい。

1 ここで Palmer は、命題 (proposition) と出来事 (event) を区別しているが、ここで言う出来事とは、Joos (1964: 149, 151) が次の引用の中で述べているような、動詞句が表わす出来事を指していると思われる。

may と can—二つの「可能性」(井筒 (成田) 美津子)

‘event’ is a ‘key technical term here, signifying the sort of thing that is specified by verb-bases, thus perhaps relations [RESEMBLE, etc.], and states [WORRY, BE COLD], as well as deeds [SHOW].’

(Joos 1964 in Palmer 1990: 34)

2 但し、can’t (cannot) はその後ろに進行形や完了形を続けることが出来る。

(i) He can’t be working at this hour!

(ii) He cannot have told a lie.

この用法について、Coates (1983: 101) は次のように述べている。

[*can’t* (invariant form)] supplies the missing negative for Epistemic MUST. It can be paraphrased by ‘it’s not possible that’ (~poss p) or by ‘it’s necessarily the case that ... not ...’ (nec ~p), and is associated with the same syntactic features as Epistemic MUST, such as Perfective and Progressive aspect, Existential subject, etc., all of which are incompatible with Root *can’t/cannot*.

また、can に進行形が伴う場合もある (Katsunobu Izutsu, p.c.)。

(iii) John can be sleeping now because he usually goes to bed at 9 p.m.

この場合の進行形は John の習慣的性質を述べているので、Kuroda (1994) の言う individual generic の用法である。

3 これに対し、thetic judgment については、“A thetic judgment by its nature relates to a specific situation.” と述べ、具体的状況と関連していると述べている。

4 Categorical judgment の predication base が主語 NP に限らないということは、既に Sasse (1987: 555) によっても指摘されている。彼は、predication base は、問題となる文ではなく、先行文脈に現れている場合もあると述べている。

Any sentence that expresses a predication must have a predication base: it must refer to an entity. This entity is not necessarily

represented by a full noun in the sentence expressing the predication; it may be named in some preceding sentence and taken up in the following by an anaphoric pronoun, or by zero, for that matter. (---) At any rate it is important for the sentence which makes the predication always to contain a slot, filled or not, for a referential element which is the predication base. (Sasse 1987: 555)

Sasse (1987: 564) は、さらに‘topicalized objects’が predication base になる場合があるということも指摘している。

- 5 葛西 (1998 : 13) は、認識的意味の may が疑問文に出来ないことについて「心的態度の一貫性」という点から説明している。
- 6 Sweetser (1990: 62) は、“Positive *can* is almost unusable in an epistemic sense”と述べている。このように認識的意味の *can* が否定の環境で好んで用いられるのは、実体が持ち得る特性の 1 つについて述べるよりも、実体が持ち得ない特性について言及する方が適切な情報を伝えることが出来るからである。

参考文献

- Coates, J. 1980. On the non-equivalence of MAY and CAN. *Lingua* 50: 209-220.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London & Canberra: Croom Helm.
- Coates, J. 1995. The expression of root and epistemic possibility in English. In J. Bybee and S. Freischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 55-66. Amsterdam: John Benjamins.
- Hofmann, T.R. 1966. Past Tense Replacement and the Modal System. *Harvard Computation Laboratory Report NSF-17, VII, 1-21*. [Reprinted in J. D. McCawley (ed.), *Syntax and Semantics 7: Notes from the*

may と can—二つの「可能性」(井筒 (成田) 美津子)

Linguistic Underground. New York: Academic Press.]

Jenkins, L. 1972. *Modality in English Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.

[Reproduced by the Indiana University Linguistic Club.]

葛西清蔵. 1998. 『心的態度の英語学』東京：リーベル出版.

Kratzer, A. 1995. Stage-level and individual-level predicates. In G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, 125-175. Chicago: The University of Chicago Press.

Kuroda, S.-Y. 1972. The categorical and thethetic judgment. *Foundations of Language* 9: 153-185.

Kuroda, S.-Y. 1992. Judgment forms and sentence forms. In S.-Y. Kuroda, *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, 13-77. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.

Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: CUP.

Langacker, R.W. 1985. Observations and speculations on subjectivity. In J. Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 109-150. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, R.W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.

Leech, G.N. 1987 [1971] *Meaning and the English Verb*. 2nd edition. London: Longman.

Palmer, F.R. 1990 [1979] *Modality and the English Modals*. London: Longman.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Sasse, H.-J. 1987. Thethetic/categorical distinction revisited. *Linguistics* 25: 511-580.

Sweetser, E.E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: CUP.

Swan, M. 1995 [1980] *Practical English Usage*. 2nd edition. Oxford: OUP.

Visser, F.Th. 1969. *A Historical Syntax of the English Language*, Part III.
Leiden: E.J. Brill.